

上演 2

2023年7月30日2校目

開催県 (鹿児島県)

津曲学園鹿児島高等学校

「本当の朝」

第47回全国高等学校総合文化祭演劇部門

第69回全国高等学校演劇大会

講評文

生徒講評委員会 担当委員

和歌山県立那賀高等学校 (和歌山県)

西本 穂乃果

この話は卒業式前日に、カリンが現実を受け入れ、前に進む決意の物語だ。

卒業式の予行練習が午後からだったのだが、早とちりした生徒たちがいつも通りの時間に登校してしまう所から物語は始まる。そこに長い間、学校に来ていなかったカリンが現れる。

軽やかに流れる爽やかな音楽に乗せて、青春がテーマであるかのようなイメージを持っていたが、話が進むにつれて空気が変わってくる。カリンは学費が払えず卒業する事ができないのだ。当たり前を用意されているはずの卒業。全員に配られる記念品のマグカップ。それを黙って見つめるその表情からも、彼女が本当は明日の卒業式に出たいという強い気持ちが伝わった。

しかし、それとは対照的に使われる劇中歌の中には「諦めることを知ったから」という歌詞。本当の気持ちを押し殺し、全てを諦めているカリンそのものを表しているかのようで胸が苦しくなった。

何も知らないクラスメートに「卒業おめでとう。」と言われた時、真実を話すことができたはずなのに、カリンは「お互いにね。」と言って否定しなかった。それは周囲を悲しませないための嘘だったに違いない。このことから、同じ教室にいても私たちはお互いをほとんど知らないのだと気付かされた。

私が一番印象に残っているのは最後、カリンが教室のドアを閉めるシーンだ。現実を受け入れ、教室を去って行くその姿からは凜とした強さを感じた。自分自身を偽りわざと演じるようにして自分の弱さを必死に隠そうとしている。

この作品から何も変わらなくても、受け入れたくない現状でも、自分の足で前に進んで行く強さを学ぶと同時に、先生や周りの人間に出来ることは無いのか、自分達がこの状況を知った時どうすれば良いのかを考えさせられた。

「本当の朝」というタイトルからは、嘘を打ち明けて初めてお互いを知る彼女達を表していた。そして、本音をぶつけて成長する大切さを私たちに訴えかけていたように思える。

